

Frances E. W. Harper の *Iola Leroy*

— “Woman’s Era” の作品として —

中 川 優 子

Frances E. W. Harper の *Iola Leroy, or Shadows Uplifted* (1892) は、南北戦争前から再建後までの、一人のアフリカ系アメリカ人の血をひいた女性の物語である。主人公の Iola Leroy は、南部のプランテーション所有者と、彼が所有して解放した元奴隷との間に生まれ、金髪に青い眼をもち、白人として育てられる。自分が黒人の血をひくとは夢にも思わず、東部の学校では奴隷制を擁護さえする。ところが父の急死により、彼女は母とともに奴隷に身を落とし、次々と売買される。幸いノース・カロライナの農場にいる時に北軍が侵攻し、所有者から解放され、彼女は看護婦として北軍の病院に勤務する。そこで出会った奴隷制反対運動者で軍医の Dr. Gresham に求婚されるが、それを断り、終戦後、叔父にあたる Robert に出会い、やがて弟や母、それに祖母まで探し当てる。彼女は一時北部に居住して人種差別を経験するが、それに屈さずに、仕事を勝ち取る。やがて南部にもどり、Dr. Gresham の求婚を再び断り、彼女同様に白人にみえるアフリカ系アメリカ人の Dr. Latimer と結婚して黒人人種全体の向上のための教育に貢献することを決意する。

プロットの展開から *Iola Leroy* は、一人の女性の奴隷体験記といえる。ただし *Iola Leroy* のみに作者は焦点をあてているのではなく、他の奴隷たちのたくましさや知恵をも描いている。*Iola* が奴隷に身を落とすという話は、回想のように物語半ばに挿入され、奴隷としての生活はあまり記述されていない。むしろこの作品は、racial uplift, つまり黒人人種の向上を謳った作品として評価されている。この作品が出版された1890年代は、Sabina Matter-Seibel がいうように、アフリカ系アメリカ女性が熱心に政治活動、知的活動をおこなった時期であった (76)。当時、再建に失敗した南部では、白人による黒人のリンチや Jim Crow Law などに反映された、白人たちの人種主義が黒人たちの危機感を強め、黒人女性たちがそれに対抗する政治運動をおこしたのである。Lois Rudnick によると、中産階級のアフリカ系アメリカ人女性たちが、主に教育と社会福祉のために黒人女性のクラブ運動を全国的に展開したり、女性参政権運動や市民権運動に大きく貢献したりした (72)。そして Elizabeth Ammons が示すように、これらの運動の趣旨を謳った短編や小説が黒人女性によって数多く書かれたのである (*Conflicting* 22)。その一つが *Iola Leroy* である。

ただし1890年代といえば、Harper が “Woman’s Political Future” という演説で “Woman’s Era” と呼んだ時代でもある。伝統的な True Womanhood とは異なる、自立した女性が New Woman として雑誌などでとりあげられ、注目された。*Iola Leroy* にも New Woman を思わせるところがあり、Harper は明らかに New Woman を意識したといえる。New Woman の表象が女性のあり方をめぐるディスコースとするなら、Harper の *Iola Leroy* はその一つなのである。といっても、この作品は、Kathleen Pfeiffer がいうように感傷小説 (13) であり、Ammons (*Conflicting* 29) がいうように、*Iola Leroy* はそれにふさわしい True Womanhood の女性でもある。このように相対立するイデオロギーが一人の主人公にみいだされる。そこで本論では、*Iola Leroy* が “Woman’s Era” に出版されたことに注目し、当時の女性をめぐるディスコースとしてはどのように

位置づけされるのか、なぜNew Womanの作品として評価されないのかを考察する。

主人公Iola Leroyの白人にみえるという外観と、母親が元奴隷であったというのはracial upliftには効果的な設定である。Hazel Carbyの分析によると、主人公がmulattaという設定は“a narrative device of mediation” (89) である。主人公の容姿を白人にすることによって、白人の世界と黒人の世界を関連づけるのである。これは白人と黒人の完全分離化が推し進められていた時代において、大きな意味をなす。主人公が黒人なら白人の読者に共感をもたれにくい、色の白い女性主人公なら白人の読者も共感するというのである。また、親が亡くなって保護を受けられなくなり、世間の荒波にさらされるというのは、Nina Baymのいう、白人の女性のフィクションのおきまりの筋立てである。主人公達は、True Womanhoodを身につけながら、試練を乗り越えていく¹⁾。HarperはIolaを白人のように描くことで、彼女の転落の描写に“ideologies of womanhood” (Carby 89) をもちこみ、Iolaの転落と回復に白人女性のフィクションの主人公たちの転落や回復と同じ意味づけをしたのである。またIolaの転落には性的な意味²⁾もあり、当時のTrue Womanhoodの価値観でなおさらその悲劇性が強調される。結果として白人読者も主人公に共感し、奴隷制に対する憤りや悲しみをもつのである。

しかし一方で、Carbyによると、mulattaは白人の世界と黒人の世界の相違、そして分離を認める存在でもある (90)。One-blood theoryに従えば、アフリカ系アメリカ人の血を一滴でもひいていれば、黒人とみなされ、黒人として生きることを余儀なくされた。そしてパッシングを黒人全体に対する裏切りとみなした。Racial upliftに貢献することが黒人の血をひいた者の義務という考え方が普及していたのである。その模範のように、Iolaはあくまで黒人として生きることを決心する。しかし人種がパフォーマティブなものだという現代の観点からすると、Julie Cary Neradの主張どおり、黒人だけが自己のアイデンティティだとするIolaの選択は“exclusive”なものである (834)。また金髪に青い眼という外見だけでなく、彼女のアイデンティティ形成時に受けた教育が白人としてのものだったことを考慮すれば、彼女が白人として生涯をおくる方が自然だと考えることも可能である。それをあえて拒絶するIolaは、Pfeifferによると、黒人のコミュニティに“coherence and moral virtue” (28) をもたらす。よってIolaの選択はracial upliftの作品にはふさわしい決断ではあるが、その後の白人の世界と黒人の世界の二つの融合を拒絶する選択でもある。このようにIola Leroyにおいては1890年代のracial upliftのためのプロパガンダの性格がとくに強調されているといえる。

この時代はまた“Woman’s Era”でもあった。南北戦争後の女子大学の開校や移民の大量流入による低技術労働者人口の増大、それに進歩主義時代のさまざまな改革によって、中産階級の白人女性の教育、職業の機会が1900年までに劇的に広がり (Rudnick 70)、それ以前のTrue Womanhoodを理想とした時代とは比較にならないほど、女性の選択肢は拡大した。その“Woman’s Era”を象徴したのがNew Womanである。ただしその表象は多様で、簡単には定義できない。それを表象した作家、画家あるいは社会批評家、はては広告によって、その意図が異なり、肯定的であったり、否定的であったりしたのである。このようにNew Womanについて表象するあるいは論じることにより、女性あるいはジェンダーをめぐるディスコースが形成されたのである。

もともとNew Womanは、Jean V. Matthewsによると、用語としては1894年あたりに登場したが、タイプとしてすぐに認識できるだけ当時存在していたという。Matthewsは“As a type, New

Woman was young, well educated, probably a college graduate, independent of spirit, highly competent, and physically strong and fearless.” (13) とし、女性参政権運動と結びつけている。要するに彼女たちは、経済力、そして社会的地位を持ち合わせていて、“professional visibility” (245) を求めて、世間のいう適正というものを無視し、新しい役割を開拓し、自分たちにとって正当だと考える地位を、女性参政権がその一つであるが、求めたのである (Carroll Smith-Rosenberg 245)。True Womanhood ならそのような自己主張は、“unnatural” (Smith-Rosenberg 245) である。よって New Woman について論じることは、“the ‘naturalness’ of gender and the legitimacy of the bourgeois social order” (Smith-Rosenberg 245)、つまり中産階級のジェンダー状況について問うものである。

ただし最近の New Woman 研究では Smith-Rosenberg や Matthews の定義する、高等教育を受けている、つまり高等教育をまかなえるだけの経済力のある、富裕な、少なくとも中産階級以上に属する女性以外にも New Woman を認めようとする傾向がある。その一つにあげられるのが、Pauline Hopkins による *Contending Forces* (1899) の主人公の一人の Sappho Clark である。彼女は、両親も家族もおらず、ボストンで下宿し、ステノグラファーとして自活し、New Woman の一面をみせている。当時、女性解放運動の場へと展開することの多かった慈善裁縫会や、自転車に乗る女性の姿が紹介され、作品は New Woman の活動を思い起こさせる。ただしこの作品がもっとも重視するのは、人種問題である。Sappho が職探しに苦労した理由に挙げるのは、彼女の人種であってジェンダーではない。

それでもこの Sappho を、Elizabeth Ammons や Sabina Matter-Seibel, Jill Bergman はアフリカ系アメリカ人の New Woman だとみなしている³⁾。Bergman は Hopkins の “Famous Women of the Negro Race” から “It seems almost as if the inspiration of the times had created a new race of colored women. . . .” を引用して、黒人女性たちが白人女性の New Woman という現象に刺激を受けたと説明している (qtd. in Bergman 87)。ただし白人の裕福な女性たちとはもともと許される自由が異なり、めざしたものが異なっていた。それがレイプの末に生まれ、孤児院に残してきた息子 Alphonso を受け入れ、自分が母であることを主張するという Sappho の選択に反映されている。それは New Woman というよりは、True Womanhood の特性を示す。それまで奴隷であるがために、母であることを主張できなかった黒人女性たちにとって、このような “bourgeois matron” (Bergman 88) は “newly accessible ideals as a means of claiming womanhood and citizenship for themselves” (Bergman 88) であったのだ。このように黒人たちは中産階級婦人の理想像を New Womanhood と融合させ、“a new race who take a distinctly maternal approach to racial uplift” (Bergman 89) を創ったのである。

Iola Leroy の場合、True Womanhood に対して否定的な描写がある。それは性的暴力の脅威にも堪え、その試練を乗り越える際の Iola の強い精神力にみられる。彼女は奴隷に身を落とし、母親と引き離されてからも、自らの意思を押し通し、白人の主人たちを拒絶し続けた結果、“Spitfire” (30) と呼ばれ、何度も転売されるにいたる。幸運にも南北戦争末期に北軍に救われ、野戦病院に看護婦として勤務し、周囲にその能力を認められる。後に弟の Harry のいう “the most harum-scarum girl” (195) だったのが、不幸の中で知恵や技術を身につけ、試練を乗り越えるのであり、病に倒れたり、死んだりしない。これが感傷小説のパターンであれば、Iola は、奴隷に身を落とした途端、墮落した女性とみなされ、やがて死を迎えるところである。このように Harper は感傷小

説あるいは白人女性のフィクションを非常に意識して *Iola Leroy* を書いている。確かに Carby の主張するように、白人の読者の共感をえるためにそうしたといえる (89) が、もう一方で感傷小説や白人女性のフィクションのパターンを否定するためともいえる。Gracie の死もそうである。“It is beautiful, so beautiful” (108) と言う彼女の最期は、*Uncle Tom's Cabin* (1852) の Little Eva の “O! love,—joy,—peace!” (428) を思い起こさせる。しかし Topsy を改心させ、父に奴隷解放について本気にさせた Eva のような周囲への影響力を発揮することはなく、Gracie はむしろ無力さを象徴する。Carby は Little Eva の死を “the sacrificial death” (76) と呼んでいるが、そのような意味さえ Gracie にはみいだせない。そのうえこの場面では、奴隷制を共存させてきた白人のキリスト教についても、否定的な見解が述べられている⁴⁾。ここで一般的な、つまり白人の True Womanhood を支配する価値観を Harper は否定しているといえる。その点では *Iola Leroy* は New Woman の作品である。

Iola の両親の結婚も True Womanhood を否定するものとしてあげられる。Iola の父親 Eugene Leroy は、看病してくれた奴隷の Marie の誠実さに応えるために結婚するのだと説明しているが、彼女を奴隷として買い受けたきっかけは、彼女の身の上話に同情し、また “the beauty of a saintly face” (69) に惹かれたからである。彼女のことを “this beautiful defenseless girl” (69) や “she, with simple, childlike faith in the Unseen, seemed to be so good and pure” (70) とたとえているが、そこにみられるのは、彼女のか弱さが Eugene の男らしさにうったえたということである。また彼女は Eugene に東部の学校で教育を施され、奴隷から解放されて結婚した後は奴隷制度を忌み嫌いながらも、大農場所有者の妻として優雅な生活をおくる。この二人の関係は、True Womanhood が理想とする、男が head、女性が heart という関係である。それは、男性の支配に女性が心の部分で影響力を与えるという、実質的には男性支配、しかし理想上は相互支配の関係である。その場合、head の男性が亡くなると、heart の女性だけでは生き残ることができない。事実、Eugene が死ぬと、誰にも守ってもらえず、Marie は奴隷になることに甘んじなければならない。それを知った時の Marie の反応も True Womanhood の女性らしいものである。彼女はショックでしばらく意識を失い、病に倒れる。それは彼女のか弱さを強調するが、無力さをも表わす。彼女は病のために書き終えた Iola への警告の手紙を送ることができず、Gracie を守ることもできない。彼女のところにもどってきた Iola が、白人たちの目を盗んで、南部へ帰ってこないようにという手紙を弟に送るのは好対照である。Marie については南北戦争後も健康が心配され、か弱さが強調される。True Womanhood の時代と異なり、ここではその無力ぶりに魅力はみいだされない。

男性に head の役割をまかせるという True Womanhood の特徴についても、Harper は批判を忘れていない。Iola は、父親が彼女たちに黒人の血をひいていることを話さなかったことを、理解しながら批判している。“It was a great mistake of my father's life, . . . and he tried to shield us from it” (274) と mulatta であることを Iola たちに知らせていなかったことが、自分の苦しみをより大きくしたと述べている。しかし Eugene の配慮は、家庭という領域にとどまり、無垢なままであるのが前提の True Womanhood の女性になら適切であったのである。“Fearful as the awakening was, it was better than to have slept through life” (274) と言って、大きな代償をとっても自身の出自の真相を知ったことについて肯定する Iola は、True Womanhood を否定する New Woman になったのだといえる。

Iola の両親の結婚と似た姿になることが予想されるのが、Iola と Dr. Gresham が結婚した場合の

関係である。ともに男性が白人で、女性が黒人である。男性が女性の献身的な看護ぶりに惹かれるという点でも同じである。そして Dr. Gresham も Iola の身の上を知って、“All the manhood and chivalry of his nature rose in her behalf” (59) とあるように、彼女のか弱さに惹かれたといえる。よって Iola が Dr. Gresham の求婚を拒絶するということは、パッシングを拒否するのみでなく、母の生き方を拒否するのだともいえる。そしてそれは、両親の結婚を否定することをも意味する (Pfeiffer 30)。つまり異人種間婚姻、そして夫が head で妻が heart という関係を拒絶したといえる。また、Pfeiffer は Dr. Gresham が黒人兵に対しても同じ団にいる仲間という意識をもっていることをあげて、彼が抽象的な法律によるのではなく、共感によって築かれる “a race-blind community” (30) 建設の可能性を示すが、結婚と同様にそれをも Iola は拒絶するのだと解釈している。

一方で、Dr. Latimer との結婚は似たもの同士の結婚である。黒人の血をともにひきながら、外見は白人と見間違われる容姿をし、また同じように教養をもっていて、読み書きにも不自由する、生まれてからずっと奴隷だった Tom たちとは異なる。そして “His words were more than a tender strain wooing her to love and happiness, they were a clarion call to a life of high and holy worth” (271) や “grand and noble purposes were lighting up their lives” (271) とあるように、racial uplift が二人を結びつける。確かに奴隷の身分におかれている間に恐怖を感じた Iola を、Dr. Latimer は “a tender lamb snatched from the jaws of a hungry wolf, but who still needs protecting, loving care” (273) とたとえていることから、彼女のか弱さに惹かれているようにみられるが、Carby によると、二人の関係は当時としては “unconventional” に対等であるという (80)。Carby は、Iola が Dr. Latimer の求婚を受け入れる前に、既に安定をえていることをあげて、二人の関係を “Harper wanted to conclude her novel with the proposition that the life of two young intellectuals would be based on a mutual sharing of intellectual interests and a common commitment to the ‘folk’ and the ‘race’” (80) と説明する。ただし “An equality, a partnership, was projected rather than actually achieved within Harper’s framework” (Carby 80) とも認めるように、現実味のない理想のまま小説は終わる。

とは言うものの、母親たちとは異なるスタンスをとる Iola Leroy に New Woman の特性をみいだすことができる。男性の庇護をえられなくても、窮状をしのいでいった彼女は、女性の自立が可能であることを証明している。事実、Dr. Gresham の求婚を拒絶し、また一時北部に住んだときに、経済的必要性がなくても、人種差別にあいながら仕事を探し求める彼女は、“I have a theory that every woman ought to know how to earn her own living. I believe that a great amount of sin and misery springs from the weakness and inefficiency of women.” (205) と言って女性の自活の必要性を主張する。だからこそ、より機会の多いニューイングランドまで、単身で出かけるのである。それは北部でさえ人種差別が存在することを示すエピソードでもあるが、彼女の自立心が確固としたものであることを示す。

以上、Iola の New Woman の側面を挙げてみたが、Iola の True Womanhood の部分が強調されていることも事実である。もともと南部の白人の大農場主の娘として多くの娘達より優れたといわれる教育を東部で受け、彼女を奴隷にするために寄宿学校より連れ戻しにきた白人たちからみても社交界の花形になりそうな上品さと美貌を持ち合わせている。そのうえ、Iola は野戦病院での献身的な看病にみられる “passionate tenderness” (Harper 57) という True Womanhood の美德をそな

えている。これは黒人にだからこそ必要な設定であったといえる。Deborah E. McDowellはHarperがアフリカ系アメリカ人のステレオタイプを修正し、True Womanhoodの敬虔さ、家庭的なこと、純粋さ、従順さをIolaに付与し、それらを美化していると説明している(38)。Ammonsは、Iola Leroyのことを“a moral paragon—linked to an elevated Victorian image of womanhood”(Conflicting 30)と呼び、そのような設定の目的が“to demonstrate the vicious untruth of the ‘wanton’ theory underlying rape-lynch mythology”(Conflicting 30)⁵⁾と説明している。つまり黒人女性は性的に不純であるというステレオタイプを否定し、そのような固定観念を一般から取り払うためにIolaはTrue Womanhoodの女性でないといけないのである。

New Womanの第二世代になると、性的自由を主張する女性たちが登場するが、それが可能であったのは、もともと白人女性は純潔であることが当然視されていたからで、New Womanはそれを制約とみなし、それからの解放を求めたのである。ところが奴隷制下の黒人女性は、主人の性的欲望の対象とされ、あげくに結婚外の性的関係ゆえに墮落していると非難されている。結果として黒人女性には“wantonness”(Ammons, Conflicting 29)のイメージがつきまとったという。白人たちによって長らく黒人女性たちに規定された“animalistic, libidinous, and depraved”(Ammons, Conflicting 31)という否定的なイメージはAmmonsの指摘するように“the antithesis of respectable womanhood”(Conflicting 31)であり、それを払拭することが必要であった。そこで純粋さをはじめとするTrue WomanhoodらしさがIolaに強調されたと考えられる。Iolaは黒人女性のステレオタイプと現実の相違を“I have heard men talk glibly of the degradation of the negro, but there is a vast difference between abasement of condition and degradation of character. I was abased, but the men who trampled on me were the degraded ones.”(115)と説明する。

Iolaは主人たちを拒んだと黒人のTomたちは話している。彼女はDr. Greshamに“I was never tempted. . . . I had outrages heaped on me which might well crimson the cheek of honest womanhood with shame, but I never fell into the clutches of an owner for whom I did not feel the utmost loathing and intensest horror.”(115)と述べている。しかし北部の寄宿学校から南部にもどるときの道中でBastineにキスされる場面は、その後のレイプの可能性を暗示する。この場面こそ、白人から黒人になった途端、女性がレイプの対象となることを象徴する。実際に奴隷としてIola Leroyが何を経験したかは具体的には語られない。Ammonsはそれは“Harper’s Victorian reticence”(Conflicting 32)が過激な描写を控えさせたのだと説明する。ただしこの沈黙がより強力な比喩となったとも述べている(Conflicting 32)。いずれにせよ、Iolaがいかなる苦難を経験したとしても、彼女が道徳的な次元では墮落しなかったこと⁶⁾を、彼女が“a moral paragon”(30)であることが証明する。

ではHarperはIolaに“Woman’s Era”のなかでは、どのような位置づけをしたのか。母Marieたちと異なる生き方を選択させた点では、New Womanであり、True Womanhoodを強調している点では、New Womanらしくない。しかしracial upliftを謳うことが、この作品の目的であるため、それが必要とするTrue Womanhoodがより強調されることとなったのである。その観点からいうと、Iolaのracial upliftのために生涯を捧げるという選択は、True Womanhoodにふさわしい自己犠牲といえる。⁷⁾

実際、Iolaがどうracial upliftに貢献するかは、黒人エリート層が議論する“Friends in

Council”の章に示されている。Iolaの母親が“the true strength of a race means purity in women and uprightness in men” (254) と言えば、弟 Harryの婚約者 Miss Delanyが教会と学校以外の領域では女性の手助けが“more in private than in public” (254) で必要であると主張する。これは黒人女性が私的領域で True Womanhoodを発揮することが必要であるということである。さらに Rev. Eustaceは“We need a union of women with the warmest hearts and clearest brains to help in the moral education of the race” (254) と言う。黒人女性の母性を racial upliftのために求めた発言である。これは Hopkinsの作風を表す“a distinctly maternal approach to racial uplift” (Bergman 89) と一致する。さらに Harperは Iolaの racial upliftに献身する姿に神々しさともいえる雰囲気を与えている。同じ第30章で、Iolaが黒人の苦難をキリストの受難にたとえて話した後、“Her soul seemed to be flashing through the rare loveliness of her face and etherealizing its beauty” (257) と、皆が惹きつけられ、“She is angelic!” (257) という感嘆詞が発せられる様子が描かれている。まるで *Uncle Tom's Cabin* の Little Evaのような救済の役割を、Iolaは生きながら担っているかのようなのである。いくら New Woman 的自立心をもっていたとしても、racial uplift のためのこのような描写は Iolaを True Womanhoodの権化にする。

Iola Leroy は New Woman に象徴される、女性のあり方のディスコースにおいては、True Womanhoodを肯定する作品だといえる。女性は self-reliant であっても、racial uplift のため、True Womanhoodを重んじるべきというのが Harperの考えなのである。かといって、彼女は女性の参政権取得に反対していたわけではない。Amina Gautierによると、Harperは“Women's Political Future”という講演で、男性に問題があるため、キリストのような救済する力をもつ一部の女性の方が有権者にはふさわしいと述べている (70)。ただ南部でリンチが横行し、Jim Crow Lawがつくられたりしたので、人種問題解決が女性解放より急務だったのである。

ところが現実には Harperの期待とは逆にすすんでいった。1893年 Susan B. Anthony率いる、National American Woman Suffrage Associationが、南部の白人女性たちを取り込むために、それまで大会にたびたび出席していた Frederic Douglass にアトランタ大会への参加をとりやめるように要請したのである。Anthony たちは Harper たちと明らかにちがって、女性参政権獲得を黒人男性の参政権獲得より優先させた。Anthony たちの運動が実りつつあったことは、1893年開催のシカゴ万博での Woman's Building 建設が証明する。Board of Lady Managers も選出された。ところが黒人のための展示館も建てられず、Board of Lady Managers に黒人女性は選ばれず、黒人たちは Columbian Exposition に思うように参加できなかったのである。その結果、Frederic Douglass と Ida B. Wells が *The Reason Why the Colored American Is Not in the World's Columbian Exposition* (1893) という抗議のパンフレットを出版するにいたった。そのような時代に先んじて *Iola Leroy* は出版され、Gautierによると四年の間に四回再版されたという (69)。そのうえ、Woman's Building の図書館に *Iola Leroy* をはじめとする Harper の作品が収蔵された。

New Woman の定義が作家あるいはそれを表象する者によって多様であったうえに、New Woman の表象自体がある種、プロパガンダであったのであるから、Harper の New Womanhood と True Womanhood の両方の特性を帯びた女性主人公の登場はありえた。ただ Racial uplift を最優先事項にしたために、True Womanhood を強調し、それに神々しさを付与したため、New Womanらしさがめだたなくなかったといえる。それが Harper の考えた “Woman's Era” に黒人女

性が生きるべき道だということである。ただし Iola にみられる True Womanhood は、奴隷制下では許されなかったことだと理解すれば、それが許されるようになったことは、黒人達にとっての “Woman’s Era” の到来を意味するのではないか。

Iola Leroy と同じような女性が、1899 年の *Contending Forces* にも表象された。Sappho が苦しむのも黒人につきまとう非嫡子出産あるいは私生児の問題である。彼女も結末では、理想の伴侶とともに racial uplift に生涯をささげることを決意する。ただしこの作品は Iola Leroy とはちがひ、New Woman を表象したものとして注目されている。この二つの作品の評価の違いは何を意味するのか。どちらの主人公も実質的にはそうたいして変わらないという印象を与える。あとの時代の *Contending Forces* では、New Woman の存在がより意識されただけということではないだろうか。ただし Iola Leroy 出版後七年たっても *Contending Forces* で racial uplift を謳い続けなければならないほど、アメリカ社会の人種状況が改善されなかったということも事実なのであろう。

注

- 1) Nina Baym は 1820 年から 1870 年までに女性によって、女性に向けて、女性について書かれたフィクションを一つのジャンルとみなし、“[chronicling] the ‘trials and triumph’ of a heroine who, beset with hardships, finds within herself the qualities of intelligence, will, resourcefulness, and courage sufficient to overcome them” (22) と定義している。
- 2) Iola が性的な暴力をうけたかどうかは明確ではない。登場前の黒人奴隷 Tom は彼女が主人たちを拒んだので、三週間で七度も転売される結果となったと Robert に語っているが、Ammons は彼女がレイプの犠牲者であるように解釈している (*Conflicting* 31-32)。その拒絶する態度から彼女が “Spitfire” と呼ばれていることを考慮すれば、彼女にとってそのように主人たちに扱われること自体が、どれだけ彼女の尊厳を傷つけ、屈辱であったかが明らかである。そのように性的暴行にさらされることは、無垢が理想とされた True Womanhood の女性にとっては、大きな悲劇を意味する。また白人から黒人とみなされるやいなや、白人男性の性的欲望の対象にされるということが悲劇をなおさら大きくしている。
- 3) Elizabeth Ammons “Sex, Transgression, and the New Woman in Henry James, Pauline Hopkins, Willa Cather, and Sui Sin Far,” *Proceedings of the Kyoto American Studies Summer Seminar July 24-July 26, 2003* (Kyoto: Center for American Studies, Ritsumeikan University, 2004) 143-159 で、Pauline Hopkins の *Contending Forces* をとりあげている。Ann Heilmann の *Feminist Forerunners* では、Sui Sin Far など多様なエスニシティの作品をとりあげて、それを “the ethnic reconceptualization of New Womanism” (3) と呼び、Pauline Hopkins についてだけでも、Matter-Seibel や Bergman による、二本ものの論文が収録されている。
- 4) Gracie の死の少し前に Iola は、自分たちから財産を奪い、奴隷にしようとしているのがキリスト教徒なら、キリスト教徒を憎むと言い、それに対して母親は、自分はその人たちからキリスト教の教えを学んだのではなく、“Some of the most beautiful lessons of faith and trust I have ever learned were from among our lowly people in their humble cabins” (107) と話している。ここにみられるのは、奴隷制を許す、白人のキリスト教に対する批判である。
- 5) 黒人男性が女性をレイプするのは、黒人女性が “wanton” だからだという、当時南部での白人による、黒人男性のリンチを支えた偏見のこと。Bettina Aptheker, *Woman’s Legacy : Essays on Race, Sex, and Class in American History* (Amherst: University of Massachusetts Press, 1982) を参照。
- 6) Matter-Seibel は Hopkins の Sappho の結婚という伝統的な結末をとりあげて、彼女が “the old ideal of the True Womanhood” (78) を Sappho に付与することで、“a difference between female virtue, an inner quality that cannot be defiled, and female propriety, which is dictated by society” (78) を確立させたと説明する。それは Sappho がレイプされて子供を産んだことが前提にある。一方で Iola が性的な

暴行を受けたかどうかはあいまいに描写されている点で、Harper は Hopkins より白人の True Womanhood に固執しているといえるかもしれない。

- 7) ここで Iola が Dr. Gresham の求婚を断ったのをパッシングの拒絶と見た場合、それを自己犠牲とみることができることを付け加える。Pfeiffer は、パッシングは自己のアイデンティティをコントロールしようとするアメリカの個人主義に矛盾しない行為であるとみなし、パッシングを否定的にとらえる考え方に異を唱える。Iola の選択は、その観点でいえば、個人を犠牲にするものである。

引用文献

Harper, Frances E.W. *Iola Leroy, or Shadows Uplifted*. Boston: Beacon Press, 1987.

Ammons, Elizabeth. *Conflicting Stories: American Women Writers at the Turn into the Twentieth Century*. New York: Oxford University Press, 1991.

—. “Sex, Transgression, and the New Woman in Henry James, Pauline Hopkins, Willa Cather, and Sui Sin Far.” *Proceedings of the Kyoto American Studies Summer Seminar July 24-July 26, 2003*. Kyoto: Center for American Studies, Ritsumeikan University, 2004. 143-159.

Aptheker, Bettina. *Woman's Legacy: Essays on Race, Sex, and Class in American History*. Amherst: University of Massachusetts Press, 1982.

Baym, Nina. *Woman's Fiction*. Ithaca: Cornell University Press, 1978.

Bergman, Jill. “‘A New Race of Colored Women’: Pauline Hopkins at the Colored American Magazine.” Heilmann, *Feminist* 87-100.

Carby, Hazel V. *Reconstructing Womanhood: the Emergence of the Afro-American Woman Novelist*. New York: Oxford University Press, 1987.

Gautier, Amina. “African American Women's Writings in the Woman's Building Library.” *Libraries & Culture* 41 (2006): 55-81. Project Muse. 18 June 2006. <<http://www.projectmuse/search>>

Heilmann, Ann. ed. *Feminist Forerunners: New Womanism and Feminism in the Early Twentieth Century*. London: Pandora, 2003.

—. Introduction. Heilmann, *Feminist* 1-14.

Hopkins, Pauline. *Contending Forces: A Romance Illustrative of Negro Life North and South*. New York: Oxford University Press, 1988.

Matter-Seibel, Sabina. “Pauline Hopkins's Portrayal of the African-American New Woman in *Contending Forces* and the *Colored American Magazine*.” Heilmann, *Feminist* 76-86.

Matthews, Jean V. *The Rise of the New Woman: The Women's Movement in America, 1875-1930*. Chicago: Ivan R. Dee, 2003.

Mc Dowell, Deborah E. *“The Changing Same”: Black Women's Literature, Criticism, and Theory*. Bloomington: Indiana University Press, 1995.

Nerad, Julie Cary. “Slippery Language and False Dilemmas: The Passing Novels of Child, Howells, and Harper.” *American Literature*. 75 (2003): 813-841.

Pfeiffer, Kathleen. *Race Passing and American Individualism*. Amherst: University of Massachusetts Press, 2003.

Rudnick, Lois. “The New Woman.” 1915, *The Cultural Moment*. Eds. Adele Heller & Lois Rudnick. New Brunswick: Rutgers University Press, 1991. 69-81.

Smith-Rosenberg, Caroll. *Disorderly Conduct: Visions of Gender in Victorian America*. New York: Oxford University Press, 1985.

Stowe, Harriet Beecher. *Uncle Tom's Cabin or Life among the Lowly*. New York: Penguin Books, 1981.

(本学文学部教授)